

「韓国の『オン神学』運動」

2016年01月18日

キリスト教月刊誌『福音と世界』は韓国で始まった「オン神学」運動を紹介している。韓国はキリスト教が爆発的に成長した国で、プロテスタント人口でも18%というから驚きである。韓国には世界のあらゆる神学が集まって、さながら「神学の坩堝」状態になっている。この危機的状态から自覚的に神学を営もうと、韓国長老教会統合派を中心に「オン神学」が提唱されている。「オン」とは「全体・皆・全て」の意味で、「オン神学」は全（オン）世界のための神学を志向し、改革神学の伝統に立って、福音主義（福音派）神学とエキュメニカル神学、並びにペンテコステ神学を合流させた神学であるという。

「オン神学」が掲げる項目は7つある。（1）三位一体論の重視、（2）神の主権と恵みの強調、（3）穩健かつ全体的な福音の主張、（4）神の国のための神学、（5）対話神学、（6）祈りの重視、（7）愛の倫理を教える神学。これらが意味するところは（1）プロセス神学や宗教多元主義神学のような三位一体論なき神学との相違、（2）歴史に対する自由主義神学的樂觀主義への反対、（3）霊や魂の救いのみを強調する福音との相違、（4）天と共に地上における神の国をも強調する歴史責任的な神学、（5）世の至る所における聖霊の働きに対する重視、（6）祈りを軽んじる一部の哲学的神学への反対、（7）世を破滅へと導く汚れた霊（悪霊）に打つ勝つ力が愛にあると信じることである、という。

神はイエス・キリストの十字架と復活において啓示された神であるから、神学は徹底してキリスト中心でなければならない。「バルメン宣言」第一項の「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一のみ言葉である」という告白が基盤である。イエス・キリストから離れた「宗教的神学」は受け入れることができないことは当然である。「オン神学」は三位一体を重視し、神の主権とイエス・キリストの贖罪を強調している。そして、伝統的な神学は啓蒙主義の下で理性の枠に縛られ、聖霊論次元の重要性を見過ごしてきたと批判している。ベルリンの壁の崩壊による東西冷戦の終結、南アフリカのマンデラと共なる人種差別の撤廃、韓国の軍事独裁政権打倒と民主国家の樹立も聖霊の働きであると捉えている。今日、ヨーロッパの諸教会は衰退しつつあるが、アジア、アフリカの諸教会は成長している。その諸地域では、聖霊による多様な働きを経験し、驚くべき奇跡や救いを受けていると聖霊の働きを注視している。更に、韓国と北朝鮮の統一、シリアの凄惨な状況からの和平、新自由主義経済による経済的危機や第三世界の悲劇の克服、自然災害、環境破壊の克服も、神は全（オン）世界、全（オン）宇宙の神であるという視点からの主題であるという。逆に、世界の各地で起こったフェミニスト神学、黒人神学、民衆神学、社会主義神学、解放の神学などは特定の問題を主題にした神学で、著しい偏狭性を持っていると批判している。この世のあらゆる事柄を均衡ある仕方で扱うことにより、真の平和と生の尊厳を確保する世界をつくり出していく神学でなければならないと主張している。

私の神学生時代は伝統的な神学であった。牧師になってからボンフェッファー神学、キング牧師の神学、そして、史的イエスの研究などから多くを学んだ。殊に、行き詰っていた頃、韓国の民衆神学には本当に励まされた。これら、自らが十字架を負った神学のインパクトは揺るぐことはない。確かに現在、民衆神学は解放の神学に取って代わられている。全世界に関わる福音を説く「オン神学」に首肯する面もあるが、歴史とどう向き合い、責任をどう果たしていくのかがはっきり見えない。今後の進展に注目したいと思っている。